

2013年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行することになりました。

この紀要も、今号で第37集となりますが、今年度の教育研究発表会を中心に、附属小学校の一年間の研究活動の成果をまとめ、それを全国に発信する役割をこの間ずっと果たしてきました。私たち附属小学校の研究内容が一目でわかると各界から確かな評価をいただいて参りました。

さて、今年度の附属小学校の研究テーマは「学びをデザインする子どもたち～つなぐ・つむぐ・つくる～」というものです。その含意は、学びをデザインする、つまり、つくり出すのは、何よりも子どもたち自身であり、そうした自主的に学びをデザインできる力をもった学習主体として子どもたちを育てていくことが私たちの願いです。その際、とりわけ今年度は「つなぐ・つむぐ・つくる」という視点において、私たち教師のみとりと支援のあり方を問いました。

私は、この「つなぐ・つむぐ・つくる」という視点は、次のような研究と実践のパースペクティブをもっていると受け取りました。

というのは、日本の学校には伝統的に様々な「境界」(Border)が張り巡らされています。

それは、たとえば、

- ・教師＝教える人 / 子ども＝学ぶ人
- ・学習＝記憶する、受け取る / 学習＝問う、探求する
- ・教師が用意する教材 / 子どもが教室にもち込む「学習材」
- ・教科書 / 真性の文化
- ・学校 / 家庭、保護者、様々な専門家、大学
- ・教室 / 地域
- ・科学 / 生活
- ・ローカル / グローバル

などが考えられます。そして、日本の学校における伝統的な学習は、主として、上述の「境界」の左側でつくり出されてきました。しかし「学びをデザインする子どもたち」を育てるという視点において大切になってくのは「境界」の右側であり、さらにいえば、両側を行き来することです。つまり、私たちが目指す子ども像は、このような教室のなかに存在する様々な「境界」を軽々と乗り越え「越境」(Border-crossing)して、学びを自ら創り出していく子どもなのです。したがって、教室での学びの姿も、教師の発問からだけでなく、子どもがつむぎ出す「問い」ともち込む「学習材」によって本物の文化の探求へと導かれ、学びのフィールドでもある地域の人々や様々な専門家と結びつきながら、教室と地域、科学と生活、ローカルとグローバルを行きつ戻りつしながら進められる学びへと変容していくことになります。

このように考えると「学びをデザインする子どもたち」と「つなぐ・つむぐ・つくる」という視点は、新しい子ども像だけでなく、新しい学びの空間の創造というパースペクティブを提起していることにもなるのです。

こうした意味合いも含んだ私たちの研究成果をまとめたこの紀要を是非ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

最後になりましたが、今年度も本校の様々な教育研究活動にご協力いただきました皆様に感謝するとともに、来年度も引き続き皆様とともに歩んでいきたいと願っております。

2014年3月